

# 英語を活かせる仕事への就業意欲： 英語専攻の外語大生は「英語」を将来の職業で どのように活かしたいと考えているのか

澁谷 由紀

## Abstract

This study aims to explore the attitudes of Japanese undergraduates' toward the use of English skills in their future occupations. Detailed semi-structured interviews with 15 students majoring English language were analysed by employing the Modified Grounded Theory Approach (M-GTA). The findings showed that the students generally expressed willingness to use English at workplace. However, 3 types of attitudinal differences were detected depending on the students' awareness, tolerance, and respect of cultural/linguistic diversity. Relevant implications for English major students in finding a job that requires English skills are discussed.

## 1. はじめに

インターネットの発達により、ビジネスにはほぼ国境はないと言われる現在、共通語としての英語の重要性はさまざまなメディアを通じて発信されている。政府の英語教育政策においても、例えば、文部科学省の『「英語が使える日本人」の育成のための行動計画』（文部科学省，2003）では、「日本人全体として、英検、TOEFL、TOEIC 等客観的指標に基づいて世界水準の英語力を目指す」（P.1）のように、「国民全員」の英語力向上の必要性が明記されている。英語教育産業の教材・広告、外資系企業の求人情報サイトなどからも、「英語力は将来的なキャ

リアにパワーを与える（エンパワメント<sup>1</sup> [empowerment]）」というメッセージが頻繁に発信されている。例えば、「上場企業における英語活用実態調査 2013 年報告書」（国際ビジネスコミュニケーション協会, 2013）には、「28.5%の企業が新入社員の採用試験で英語テストを実施している」、「51.7%の企業がTOEIC スコア以外にスピーキング・ライティング能力を昇進・昇格の参考にしている」（n=228）などのような報告がある。また、Matsuura, Fujieda & Mahoney（2004）の調査によると、調査協力者である大学生（n=660）の7割以上、日本人英語教員（n=50）の6割以上が「英語力を身につけていることで良い仕事に就ける」という意見に賛成している。グローバル社会において、高い英語力が就職試験や就職後の昇進に有利に働くことが強調されれば、英語力をアピールするために英語学習へのモチベーションは高まるのは当然であろう。

一般に、「英語を活かして仕事をしたい」という場合、以下の3つの選択肢が考えられる。1) 「専門的な英語を仕事にする仕事」（通訳・翻訳業、英語教師など）、2) 「英語で仕事をする」（職場での公用語は英語で上司や同僚とのやりとりも英語の仕事）、3) 「仕事で英語を使う」（職場の公用語は日本語で海外の顧客や取引先とのやり取りに英語が使われる仕事）のように分けられるであろう。英語専攻の外語大卒業生が、日本の多くの企業で、培った言語能力や留学経験を活かせる可能性が高いのは、3) の選択肢であろう。具体的には、国内のサービス産業、例えば、航空・運輸・物流業界、旅行・ホテル業界等の企業で英語を使って働くということである。

仕事における英語の必要性は徐々に高まっていると広く認識されているが、仕事で英語を活かせるかどうかは企業によって異なり、求められる英語力も職種、部署、役職などによって異なっている（司馬, 2001 ; 椿, 2001）。前述の上場企

---

<sup>1</sup> 「エンパワメント」は「社会、組織の構成員一人一人が発展や改革に必要な力をつける」という意味 [コトバンク (ブリタニカ国際大百科事典) <https://kotobank.jp/word/エンパワメント-163595> (閲覧日 2019年7月22日)]。

英語を活かせる仕事への就業意欲：英語専攻の外語大生は「英語」を将来の職業でどのように活かしたいと考えているのか

業を対象とした調査（国際ビジネスコミュニケーション協会，2013）においても、英語の使用頻度や英語を使用する社員の割合は明らかでなく、個人ベースでの業務上の必要性については曖昧である（中原，2016）。企業における英語使用の実態調査として、仕事での英語使用と必要な英語技能、英語学習の状況などについて北海道在住の就労者を対象に行った内藤他（2006）の調査（n=1,085）によると、約7割の回答者が英語を「使わない」と回答している。「使う」と回答した人でも使用頻度が低い（「月数回」、あるいは「年数回」使う）場合が最も多く（回答者全体の15%）、使用頻度が高い人（「毎日」あるいは「週数回」使う）は1割未満で非常に少なかった。また、仕事における英語の必要性（客観的および主観的な必要性）が、日本の就労者に、どの程度浸透しているかについて、統計的データで検証した寺沢（2015）は、「英語を仕事で使用している」という行動ベースの基準では、せいぜい就労者の1-2割程度で限定的であり、英語力を活かす機会は性別を問わず開かれているわけではないことなどを示唆している。

## 2. 問題

首都圏の大学生を対象とした「大学生の英語に対する自信度」についての意識調査（東京広告協会，2014）（n=800）では、積極的に英語を勉強したいと考える大学生は約4割で、殆どの学生は英語力に自信がなく、約8割の学生が就職先企業の公用語が英語になることに不安に感じ、海外や外資系企業で働くことに消極的な学生も約6-7割であることが報告されている。一方で、本研究の調査協力者のような英語専攻の外語大生の多くは、英語が好きで、英語を学問として専攻したという「学歴意識」を持ち、「英語を活かせる仕事に就きたい」、「英語ができれば就職活動が有利に進む」と考えて英語学習に熱心に取り組み、「英語」と「将来の職業」の関係を意識することが多いと考えられる。

しかし、通訳や翻訳などの英語の専門職を除き、多くの日本企業における職種や職場では、ごく一部を除いて必ずしも専門的な高い英語力が求められるわけで

はない (e.g., 司馬, 2001 ; 寺沢, 2015 ; 椿, 2001) 。大学で英語を専攻して、漠然と「英語を使って仕事をしたい」と思っても、英語を活かせる業務はそれほど多いわけではなく、大多数は、英語力をあまり必要としない仕事に就く可能性が高い (Lambert, 2001) 。このような状況の中で、外語大生は自らの英語学習経験をどのように捉え、学んできた「英語」を職業選択や将来の仕事においてどのように活かそうと考えているのであろうか。

「英語を活かせる仕事」にこだわりすぎれば、職業選択の幅が狭まり、英語力以外の能力や適性を活かせる職業選択の機会を見逃すという可能性も考えられる。就職に関わる選考では、習得した言語の特異性や専門性、留学経験で培った異文化適応能力などが評価されるのであって、当然、外語大卒だから有利ということもない。例えば、日本経済団体連合会 (経団連) (2015) が 2014-15 年にかけて、経団連会員企業と地方別経済団体加盟企業を対象に行ったグローバル人材に関する調査 (n=463) では、求められる人材の素質、知識・能力として最も重視するのは「海外との社会・文化、価値観の差に興味・関心をもち、柔軟に対応する姿勢」であった。一般的には、いわゆる「異文化理解力」、あるいは「異文化コミュニケーション力」のような能力であり、「英語をはじめ外国語によるコミュニケーション能力」は第3位であった。また、日本経済団体連合会 (経団連) (2018) の「高等教育に関するアンケート結果」 (n=443) では、企業が大学生に対して期待する資質、能力、知識などは、文系・理系学生にかかわらず、「主体性」、「実行力」、「課題設定・課題解決力」が上位であり、「外国語能力」は低い順位にとどまっていた。また、2018年4月入社対象学生について選考にあたって企業が特に重視した点は、「コミュニケーション能力」 (82.0%)、「主体性」 (60.7%)、チャレンジ精神 (51.7%) などが多く、語学力は 6.6%であり (「2017年度新卒採用に関するアンケート」日本経済団体連合, 2018) (n=597)、実際に企業が評価するのは、語学力以外の資質や能力であることが報告されている。

英語を活かせる仕事への就業意欲：英語専攻の外語大生は「英語」を将来の職業でどのように活かしたいと考えているのか

### 3. 目的

英語専攻の外語大生は、学んできた英語と将来の職業選択をどのように結びつけ、仕事でどのように活かそうと考えているのであろうか。本研究の調査結果から、「英語を活かした仕事に就きたい」、「英語ができれば仕事を見つけやすくなる」という漠然とした思い込みにとらわれず、職業選択の幅を広げ、将来のキャリアに向けて、どのような英語を身につける必要があるのかという英語学習の具体的な目標設定について考えるヒントを提示できると考えた。

#### リサーチ・クエスチョン

1. 英語専攻の外語大学生は、学んできた英語を職業選択とどのように関連づけ、将来の職業においてどのように活かしたいと考えているのか。
2. どのような英語学習経験や心理プロセスがそれらに影響を与えているのか。

## 4. 方法

調査協力者および調査時期、データ収集の方法は Table1 の通りである。

Table1 インタビュー調査の方法

分析テーマ	英語専攻の外語大生の英語を活かせる仕事への就業意欲が形成されるプロセス
分析焦点者	外語大で英語を専攻語とする就職活動を控えた学生
調査対象者	A外語大学の英語を専攻語とする学科(英米語学科、国際コミュニケーション学科)における2年次生(6名)と3年次生(9名)の合計15名(女子学生8名、男子学生7名)
調査期間	2018年12月～2019年3月
調査方法	半構造化面接による聞き取り調査 ・調査対象者の募集は、まず筆者の所属する専攻(専攻語は英語)の2、3年次生を対象に面接調査の協力者を募り、さらに、協力を得られた学生に対して、面接調査に協力を得られる学生の紹介を依頼し、対象者を増やした。 ・面接内容は、調査対象者の同意を得て、ICレコーダーに録音し、音声データから逐語録化したものをデータとした。面接前に研究の趣旨と研究倫理に関する文書を提示し協力の同意を得た。面接時間は約45-60分程度であった。
インタビュー内容	おもな質問項目は、「英語にふれたきっかけ」、「幼少時、小、中、高校での英語学習経験」、「外語大に入学した目的・意図」、「大学入学後の英語学習への意欲の変化」、「海外経験(留学、語学研修、インターンシップ等)の英語学習への影響」、「英語学習の目標」、「将来の就業に関わる希望、理由」、「英語を活かした仕事へのこだわり」などであった。

### データ分析方法：M-GTA

将来的なキャリアを見据えた職業選択においてどのように「英語」を位置づけるのかは、学習経験や学習環境における様々な人々からの影響、「英語にふれた」、「英語を使った」異文化体験から形成されてきたのではないかというプロセスに注目して、修正版 GTA (Modified Grounded Theory Approach) (木下, 2007) により検討した。

データ分析の前に分析テーマを「英語専攻の外語大生の英語を活かせる仕事への就業意欲が形成されるプロセス」とし、分析焦点者を「外語大学で英語を専攻語とする就職活動を控えた学生」と設定した。この2点を分析上の視点とし、1例目の逐語録を検討し、英語学習経験、異文化交流体験、英語に対する意識や英

英語を活かせる仕事への就業意欲：英語専攻の外語大生は「英語」を将来の職業でどのように活かしたいと考えているのか

語学習モチベーションの変化のプロセスに関わる箇所を抜き出して、ヴァリエーション（具体例）として分析ワークシートを作成しながら概念生成を行なった。その際、概念を広く様々な視点から解釈し、気づいたことを理論的メモ欄に記入し、定義と概念名を設定した。

そして、その概念の類似例を2例目の分析対象者の発話から検討し、新たに見出された概念に対して、新たな分析ワークシートを追加していった。15例目が終了する前に理論的飽和化を達成したと判断できるまで概念の再検討を行い、最終的に27の概念が生成された。概念間の関係性に注目してさらに抽象度を上げ、11のカテゴリー、6のカテゴリー・グループを設定した。分析対象者により生成された概念・カテゴリーの違いが確認され、外語大生の英語を活かせる仕事への就労意欲（＜仕事での英語使用についての意向＞）には個人差があり、生成された概念・カテゴリーの違いをもとに、調査協力者を3つのグループに分類した（Table2-1、2-2）。カテゴリー・概念間の関係の全体像はFigure1にまとめた。本文中においては、カテゴリー・グループを〔 〕、カテゴリーを〈 〉、概念を【 】で示した。

## 5. 結果と考察

### 全体的なストーリーライン

調査協力者の〔英語との出会い〕の多くは、【海外旅行・海外滞在経験の記憶】や【異文化交流の記憶】、あるいは、【英語教室の記憶】にある＜英語へのポジティブなイメージを形成＞するきっかけとなった経験や体験である。しかし、中には、〔英語との出会い〕において違和感や戸惑いなど＜英語へのネガティブなイメージを形成＞し、【英語に対する否定的な感情】を喚起してしまう場合もある。

中学生になって英語を教科として学ぶようになると、〔英語学習へのモチベーションの変化（大学入学前）〕を経験する。＜英語学習へのモチベーションの変化の要因＞はいくつか考えられる。【教科としての英語は嫌】になり、高校生に

なって学習内容が一層難しくなると学習モチベーションがさらに低下することもある。一方で、幼少時に【英語に対する否定的な感情】を持っていても教科の一つになったことで、かえって学習意欲が高まったり、＜英語へのポジティブなイメージを形成＞していても、実際に「できない」ことを実感することで【苦手意識・悔しさがモチベーションに繋がる】場合もある。教科としての英語の成績が良い場合は、【英語が得意だからモチベーションに繋がる】。そして、自分の英語力に対して自信を持ち肯定感が形成され、【英語に対する自己効力感】が促されることになる。

一時的に学習モチベーションが低下したり、成績が悪くなっても、【英語がとにかく好き】という感情が継続している場合は、学習モチベーションは維持されることもある。高校卒業時や大学入学の段階で、多くが〔英語学習の目標設定（進路選択と大学入学後）〕について考えるようになり、＜どんな英語を目指すのか＞が将来の進路、キャリア選択に影響を与える。＜英語へのポジティブなイメージを形成＞して以来、【英語がとにかく好き】で学習モチベーションが維持されれば、将来英語を活かした職業に就くことが目標となり、「とにかく英語ができるように（話せるように）になりたい」という【英語を中心に学びたい】という進路選択をする者もいる。一方で、大学進学前から【英語で何かを学ぶ】ことを意識して進路を選択する者もいる。大学入学後は、高校までとは異なる英語学習や異文化経験を通して、【大学での英語学習から得た気づき（英語力に対する自信、不安、焦りなど）】がもたらされ、卒業までに「どのような英語を身につけたいのか」という学習目標がさらに変化することもある。



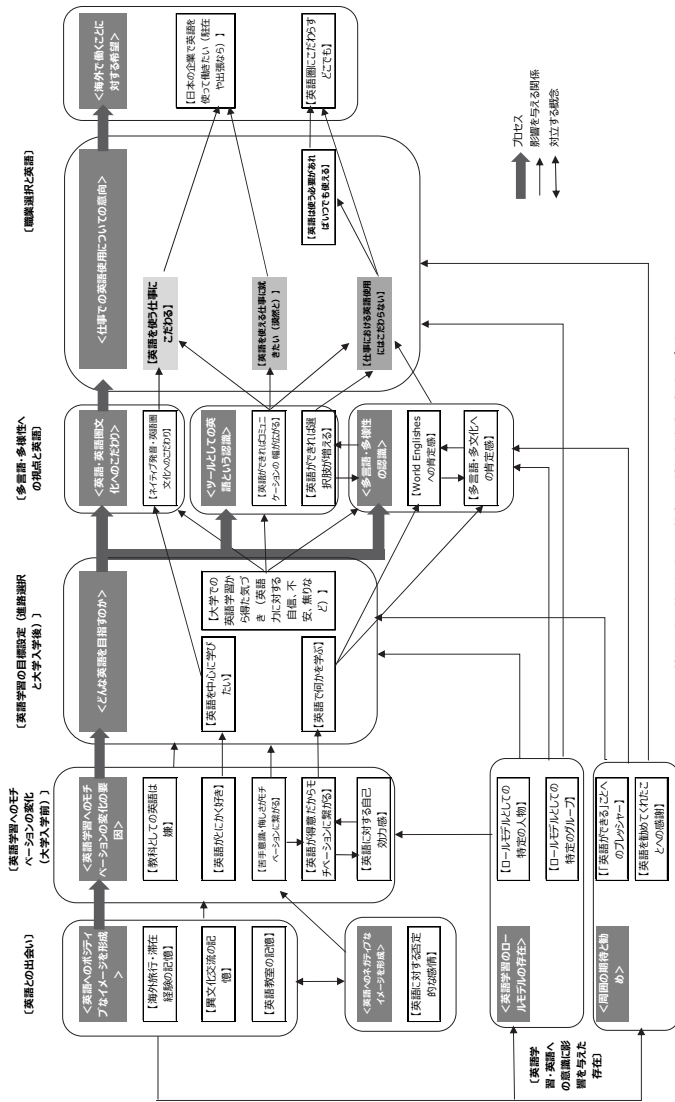
英語を活かせる仕事への就業意欲：英語専攻の外語大生は「英語」を将来の職業でどのように活かしたいと考えているのか

**Table 2-1 英語を活かせる仕事への就業意欲の形成プロセス(カテゴリと概念)・ケースマトリックスによる調査対象者のグループ化**

＜カテゴリ名＞		インタビュー対象者(15名)																
【概念名】		No. 1 4 6 10				2 9 14			3 5 7 8 11 12 13 15									
定義		性別		学年		F M F		F M F		M F F		F M F		M F M		F M		
		3	3	2	2	3	3	2	3	3	2	2	3	3	2	3	2	3
<b>&lt;英語へのポジティブなイメージを形成&gt;</b>		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
1【海外旅行・海外滞在経験の記憶】		○	○	○		○												○
英語を知るきっかけになった海外旅行・滞在、その時感じた英語に対する肯定的な感情																		
2【異文化交流の記憶】		○	○	○		○				○		○	○	○				○
英語を知るきっかけになった異文化交流、メディアを通じて習った英語、その時感じた英語に対する肯定的な感情																		
英語との出会い	3【英語教室の記憶】	○	○	○		○	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○
	周知の人たちからの勧めで選んだ英語教室で感じた英語に対する肯定的な感情																	
	<b>&lt;英語へのネガティブなイメージを形成&gt;</b>								●	●								
4【英語に対する否定的な感情】									○	○								
英語にふれるきっかけとなった経験(例えば、周知の勧めで選んだ英語教室など)で学習意欲を持ってしまった記憶																		
<b>&lt;英語学習へのモチベーションの変化の要因&gt;</b>		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
5【教科としての英語は嫌】		○	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
中学生になって教科としての英語は嫌いになった経験																		
英語学習へのモチベーションの変化(大学入学前)	6【学習意欲・怖しがモチベーションに繋がる】																	○
	英語ができない、あるいは、思っていないほどできないことを実感したこと後の英語学習のモチベーションに繋がった経験																	
	7【英語とのかくつき】	○	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○				○
できる、できないにかかわらず、たえ不成績が悪くなったも英語とのかくつきという感情																		
8【英語が得意だからモチベーションに繋がる】		○	○	○		○	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○
英語ができる、得意科目であることにより、一層モチベーションが高まる																		
9【英語に対する自己効力感】									○	○		○	○	○	○	○	○	○
自分の英語力に対する「できるという自信」「得意という好感」																		
<b>&lt;どんな英語を目指すのか&gt;</b>		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
10【英語で何かを学ぶ】									○		○	○	○	○	○	○	○	○
国際コース等の英語重視のコースを選び普通科を選択した経緯や理由、専門学校、大学進学時に英語プラス何かを学ぶという意欲を持って学ぶことを選択した理由																		
英語学習の目標設定(進路選択と大学入学後)	11【英語を中心に学びたい】	○	○	○	○	○	○	○	○									
	進学を考える際の「英語」を専攻するという意思決定の理由と外語大で英語を学ぶことについての考え																	
	12【大学での英語学習から得た気づき(英語力に対する自信、不安、焦りなど)】	○	○								○	○	○	○	○	○	○	○
大学で英語を専攻したことでもたらされた成果、学習目標の実現、目標レベルに達していない、思ったように身につかないという不安、焦りなどへの気づき																		
<b>&lt;英語学習のロールモデルの存在&gt;</b>		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
13【ロールモデルとしての特定の人物】		○	○			○				○	○	○	○	○	○	○	○	○
英語学習経験、異文化交流体験等において出会った英語学習のモデルや目標、動機づけとなる具体的なイメージの基になる人物の存在																		
英語学習への意欲に影響を与えた存在	14【ロールモデルとしての特定のグループ】	○								○	○	○	○	○	○	○	○	○
	英語学習経験、異文化交流体験等において出会った英語学習のモデルや目標、動機づけとなる具体的なイメージの基になる人々の存在																	



英語を活かせる仕事への就業意欲：英語専攻の外語大生は「英語」を将来の職業でどのように活かしたいと考えているのか



〔英語との出会い〕から、さまざまな英語学習段階において〔英語学習へのモチベーションの変化（大学入学前）〕をもたらし、英語学習の目標や動機づけ、さらに将来の職業選択にも大きな影響を与えているのが、〔英語学習・英語への意識に影響を与えた存在〕である。〈英語学習のロールモデルの存在〉は、【ロールモデルとしての特定の人物】であったり、特定の職業グループの人々（【ロールモデルとしての特定のグループ】）である場合もある。〔英語学習・英語への意識に影響を与えた存在〕は身近な家族であることも多く、幼少期に英語教室に通ったきっかけになっている。しかし、目標となるような英語が身につけていないという焦りや、「外語大生だから英語ができて当たり前」という【「英語ができる」ことへのプレッシャー】を少なからず感じている者もいる。同時に、〔英語との出会い〕において〈英語へのポジティブなイメージを形成〉する機会やきっかけを与えてくれたことが、英語専攻や海外留学に繋がったことに対して、多くの学生が【英語を勧めたことへの感謝】の念を抱いている。

英語に対するポジティブなイメージは、学習モチベーションとしては有効に働くことが多いが、時に〈英語・英語圏文化へのこだわり〉（【ネイティブ発音・英語圏文化へのこだわり】）のような意識に繋がる場合もある。一方で、【英語ができればコミュニケーションの幅が広がる】という〈ツールとしての英語という意識〉は多くの学生に共通している。さらに、異文化交流体験や実際に英語を使った経験を経て【多言語・多文化への肯定感】や【World Englishes への肯定感】などの〈多言語・多様性の認識〉を深めている者もいる。このような視点は、【英語ができれば選択肢が増える】という認識を促し、将来の〔職業選択と英語〕にも影響を与えることになる（〔多言語・多様性への視点と英語〕）。

大学2、3年生になり就職活動を控えて将来の〔職業選択と英語〕について考える際には、これまでの〔英語学習の目標設定（進路選択と大学入学後）〕、〔英語学習・英語への意識に影響を与えた存在〕、〔多言語・多様性への視点と英語〕などからの影響を受けながら〈仕事での英語使用についての意向〉を形成

英語を活かせる仕事への就業意欲：英語専攻の外語大生は「英語」を将来の職業でどのように活かしたいと考えているのか

すると推察される。将来の仕事での英語の活かし方については、【英語を使う仕事にこだわる】、【仕事での英語使用にはこだわらない】、または【英語を使える仕事に就きたい（漠然と）】のような3通りの方向性が見られる。さらに、【仕事での英語使用にはこだわらない】が、【英語は使う必要があればいつでも使える】のような意識を持つ者もいる。そして、＜海外で働くことに対する希望＞は、【英語を使える仕事にこだわる】、あるいは【英語を使った仕事に就きたい（漠然と）】の場合には、【日本企業で英語を使って働きたい（駐在や出張なら）】に、【仕事での英語使用にはこだわらない】場合は、【英語圏にこだわらずどこでも】のように、＜仕事での英語使用についての意向＞の影響があることが推察される。

#### カテゴリー毎の内容と「英語を活かせる仕事への就労意欲」のグループ化

本研究では、仕事での英語使用についての意向が形成されるプロセスを基に、調査協力者を【英語を使う仕事にこだわる】（グループⅠ）、【英語を使える仕事に就きたい（漠然と）】（グループⅡ）、【仕事での英語使用にはこだわらない】（グループⅢ）という3つのグループに分類した。これらのグループ化は調査協力者の語りを基にしたもので、必ずしも一般的な傾向と一致するものではないが、英語専攻の外語大生が、一律に「英語を活かせる仕事に就きたい」わけではないことをグループ化によって具体的に示し、職業選択の意向を細かに捉えるという点で意味がある。以下、生成されたカテゴリー毎の内容を示す。

#### 【英語との出会い】と【英語学習へのモチベーションの変化（大学入学前）】

【英語との出会い】の多くは、＜英語へのポジティブなイメージを形成＞するきっかけとなっている。多くが、幼少期に家族と行った海外旅行先で実際に英語を使った経験（【海外旅行・海外滞在経験の記憶】）である。また、例えば、「ニュージーランド交流会」のような、学校で海外から来た生徒と英語を使って話す経験をした【異文化交流の記憶】がきっかけとなっていることもある。さらに、

「英語は将来役立つ」、「英語が出来れば進学や仕事に有利」というく周囲の期待と勧め> (両親、特に母親、兄弟) によって、英語教室に通い、歌やゲームを通じて英語を話すことや英語圏文化にふれることを楽しいと感じた【英語教室の記憶】である場合も多くみられた。一方で、「どうしても子どもには英語をやらせたい」という母親の意向で英語教室に幼稚園の頃から入れられ「イヤイヤやっていた」(I-5) のように苦手意識や拒否反応などの【英語に対する否定的な感情】を形成してしまう場合もある (<英語へのネガティブなイメージを形成>)。

幼少期の英語に対するポジティブな感情は、中学校、高校、大学における英語学習の様々な段階でいくつかの要因によって変化する (<英語学習へのモチベーション変化の要因>)。中学校の教科としての英語はそれまでとは違う「学習」であり、特に文法の勉強は「つまらない」、「苦手」、「むずかしい」などの理由で学習モチベーションが低下する者も多くみられた (【教科としての英語は嫌】)。また、幼少期の〔英語との出会い〕において【英語に対する否定的な感情】を持った場合でも、中高生になって英語学習の必要性を認識し【苦手意識・悔しさがモチベーションに繋がる】場合もある。

英語学習モチベーションの低下を経験したり、成績が悪くなっても【英語がとにかく好き】という感情は継続している者も多い。英語の成績が良い場合は、「中高と英語に苦労はしなかった。」(I-11)、「知識がどんどん増えていって楽しかったです。」(I-4)、「わかるし、話すから、先生も気に入ってくれて、友だちにも教えてよって言われた。」(I-13) のように、【英語が得意だからモチベーションに繋がる】ことで自信を得て (【英語に対する自己効力感】)、さらに学習モチベーションが向上するという好循環を生み出していることも窺える。

以上の2つのカテゴリー・グループに関しては、3つのグループ間で大きな差は見られなかった。

### 〔英語学習の目標設定〕

中学・高校までの英語に対する学習意欲の高低や、英語という言葉に対する肯

英語を活かせる仕事への就業意欲：英語専攻の外語大生は「英語」を将来の職業でどのように活かしたいと考えているのか

定的感情は、その先の進路選択における英語の位置づけ（高校進学時に英語に力を入れている国際系コースを選ぶのか、あるいは、大学において「英語を専攻」するのかという意味決定）、さらに<どんな英語を目指すのか>という〔英語学習の目標設定（進路選択と大学入学後）〕にも影響を与える。

【英語がとにかく好き】で学習モチベーションが維持されれば、将来英語を活かした職業に就くことが目標となり、【英語を中心に学びたい】（英語専攻）という進路選択に繋がる（グループ I）。例えば、小学校の頃からキャビン・アテンダントになることが夢であった学生は、「CA が基準でそこで私の進む道が決まってく感じ……」（I-4）、あるいは、児童英語教師を目指すという目標を明確に持っていた学生は、「児童英語の勉強をするってここに来たんで、その時点で何するかっていうのは見据えてました。」（I-10）のように、職業と英語を学ぶ目的の結びつきが明確であることがわかる。また、大学入学前から英語に対する自己効力感を得ている学生（グループII,III）の多くは、「ビジネスの中で一つの役に立つツールとか、そういう感じだなんて薄々気づいて……」（I-7）、「英語を勉強するにしてもそれと一緒に何か勉強した方が、絶対伸びると思ってた。」（I-11）、「英語だけ特化してもみんなこれから話せるようになるだろう。」（I-13）など、【英語で何かを学ぶ】という<ツールとしての英語という認識>があり、英語が目標ではなく、英語は大学での学びや仕事で使うものであり、コミュニケーションのためのツールという考えを意識していたことが窺える。

大学入学後は新たな学習機会を得て、「英語のクラスでは思ってること全部言わないと伝わらない。」（I-7）、「間違いを恐れなくなった。」（I-14）、など、多くの学生が英語を話すことに対して前向きになったと感じていた。一方で、卒業後の進路を視野に入れ、自身の英語力を客観的に評価するようになって目標とするレベルに達していないことへの焦りや不安を感じている学生もいる。例えば、「英語をこう、喋るとか、まあ使う、書くにしても、読むにしてもそうですけど、

楽じゃないなっていうのに、気づいて……ほんとには話せないのに、読めないのに、ちょっとできると読めるんだとか、話せるんだ、書けるんだって錯覚してしまう、そういう危険性があるなって気づいて。」(I-8)のような例である。大学2年間である程度レベルは上がったが、まだまだ目標とする英語力には遠いことを自覚し、「もし、英語で仕事する、外資系行くとかなるんだったら、もっと本気でレベルアップしていかないといけないなっていうのは感じていて……(I-8)」のように、卒業後の仕事を意識して英語を学ぶ目的が明確になったり、具体的にどのような英語力を身につける必要があるのかを意識することで、学習モチベーションや目標にさらなる変化がもたらされていると考えられる（【大学での英語学習から得た気づき（英語力に対する自信、不安、焦りなど）】）。

#### 〔英語学習・英語への意識に影響を与えた存在〕

英語学習のさまざまな段階での学習モチベーションや目標に大きな影響を与えているのが、＜ロールモデルの存在＞である。ロールモデルは、英語学習や異文化交流の場面で出会った英語学習への動機づけとなるような人々である。また、どのように仕事で活かすのかという具体的なイメージの基になる人々であり、英語の先生・教員、留学経験のある兄弟姉妹、友人などであることが多い。殆どの学生が【ロールモデルとしての特定の人物】の存在を意識し、グループ間の大きな違いは見られなかった。【ロールモデルとしての特定のグループ】については、例えば、「英語を話すボランティアの人々」、「CA 職という仕事」など、英語を使う活動をする人々や職業への憧れが学習目標になり、学習意欲や、職業選択の希望に影響を与えたケースが見られた。

身近な家族も〔英語学習・英語への意識に影響を与えた存在〕としてある。幼少期に英語教室に通い始めたきっかけは、母親の「自分ができなかったから子どもにはできるようになって欲しい」という理由によるものが殆どである。英語にふれるきっかけや学習環境を整えてくれた両親に対して、目標とする英語力が身につけていないという焦り、「外語大生だから英語ができて当たり前」という周



英語を活かせる仕事への就業意欲：英語専攻の外語大生は「英語」を将来の職業でどのように活かしたいと考えているのか

困からの【「英語ができる」ことへのプレッシャー】を少なからず感じている者もいる。同時に、英語学習を継続できたことに対して、「僕への投資を惜しまなかった。」(I-13)、「これからやっぱり英語を使う機会とか増えてくるので、感謝してというか、やってみてよかったなって。それがここまで人生に影響すると思わなくて……当時英語やってなかったら今ここにいないし、留学とかもなかった。」(I-6)のように、多くの学生が周囲の人々に対して【英語を勧めてくれたことへの感謝】をしていることもわかった。

### 〔多言語・多様性への視点と英語〕

<どんな英語を目指すのか>という英語学習の目標は、<英語・英語圏文化へのこだわり>、<ツールとしての英語という認識>、<多言語・多様性の認識>に影響を与えている。【英語がとにかく好き】という感情は、「ネイティブ発音で話したい。」(I-1)、「行くならアメリカ、カナダ、イギリスなどの英語圏。」(I-2)、のような【ネイティブ発音・英語圏文化へのこだわり】に結びつく傾向がみられる(グループ I)。一方で、「いろんな人が英語を使ってる中で、一番いい形でコミュニケーションする方法……ほんとにシンプルな英語でいいんだってことに気づいた。」(I-3)のように【英語ができればコミュニケーションの幅が広がる】というのは殆どの学生に共通した認識であった。

英語学習経験や異文化交流体験から<多言語・多様性の認識>を得て、英語や英語圏文化の枠を超えた多言語や異文化とのかかわり方や多様なものの見方や考え方に対する認識(【多言語・多文化への肯定感】)を深めている学生も多い(グループ III)。例えば、「マルチリンガルの能力に憧れる。」(I-11)、「日本語以外の言語に接した、その言語がたまたま英語であっただけ。」(I-12)、「英語は単なるきっかけとなっただけで特に強いこだわりがあるわけではない。」(I-5)などのような例である。さらに、「国によって話す英語がちがうので、正しく簡単に伝える英語をなるべく習得したい。」(I-13)など、【World Englishes への肯定感】は、「人との繋がりや仕事の機会や知識が広が

る。」(I-5)、「複眼的な視点から物事を捉えられ、決められるようになる。」(I-13)などの【英語ができれば選択肢が増える】という認識(グループⅢ)と関連していると推察される。

### 〔職業選択と英語〕

〈仕事での英語使用についての意向〉というカテゴリーは、本研究の中心的概念と位置づけられ、【英語を使う仕事にこだわる】(グループⅠ)、【英語を使える仕事に就きたい(漠然と)】(グループⅡ)、【仕事での英語使用にはこだわらない】(グループⅢ)、という3通りの方向性が確認された。

大学2、3年生になり就職活動を控えて、学んできた英語を将来の仕事にどのように結びつけるのか〔職業選択と英語〕について再考するようになる。【英語を使う仕事にこだわる】(グループⅠ)場合は、例えば、「CA職に就きたい」、「児童英語教師になりたい」、「大企業の海外営業部門で働きたい」など、英語を使う特定の仕事を指すという明確な目標が設定されている。一方で、「せっかく外語大で英語専攻だから英語を活かした仕事をしたい」(I-9)のように仕事のイメージが未だ明確ではないケースもある。また、「今はカッコいいとかじゃなくて、(英語が)使えるのが当たり前の状況じゃないですか……必須じゃないっていう感じがしているのかもしれないですね。」(I-3)、「使っただけで、こう、自分の幅が広がるなら使いたい。」(I-15)など、【仕事での英語使用にはこだわらない】という意向も確認された(グループⅢ)。さらに、グループⅢには【英語は使う必要があればいつでも使える】という英語力への自信やプライドを感じさせる語りもあった。例えば、「プログラミングしか勉強してないって人は、そこでちょっと壁に打ち当たるというか、そんな時に、言語ができれば助けになるかな……10年後くらいまでは、そんなに言語はおつきなウエイトは占めないと思いますけど、30代後半、40代後半になった時に、もしかしたらそこで、なんかこう花開くのかな……その時に役に立てばいいかなって感じです。」(I-11)のような例である。

英語を活かせる仕事への就業意欲：英語専攻の外語大生は「英語」を将来の職業でどのように活かしたいと考えているのか

<海外で働くことに対する希望>についての【英語圏にこだわらずどこでも】働けるという意味は、<多言語・多様性の認識>、【英語ができれば選択肢が広がる】から繋がる傾向があることがわかった。一方で、「海外での仕事は出張や数ヶ月の駐在ならばよいが、長期的な海外滞在は自信がない」（【日本企業で英語を使って働きたい（駐在や出張なら）】）という希望は、<英語・英語文化圏へのこだわり>と【英語を使う仕事にこだわる】、【英語を使える仕事に就きたい（漠然と）】という意向との繋がりがあることが窺えた。

## 6. 総合的考察

本研究は、英語専攻の外語大生が、英語との関わりや学習のプロセスを経て学んだ英語を将来の仕事でどのように活かしたいと考えているのかについて質的調査法を用いて明らかにすることを目的とした。15名の学生に対する半構造化面接によって収集したデータを分析した結果、調査対象の英語専攻の外語大生は、英語を使って仕事をすることや海外で働くことについては、概ね前向きであることがわかった。さらに、仕事における英語使用の意向は、〔英語学習の目標設定（進路選択と大学入学後）〕、<英語・英語圏文化へのこだわり>、<多言語・多様性の認識>、<ツールとしての英語という認識>などの影響を受けて、【英語を使う仕事にこだわる】、【英語を使える仕事に就きたい（漠然と）】、【仕事での英語使用にはこだわらない】という3通りの方向性があることが確認された。

近年、多くの日本企業が英語を非母国語としているアジア地域に進出し、今後事業拡大の流れがますます強まることが予想される。ビジネス場面での英語使用は、英語を非母国語とする話者とのコミュニケーションがおもになると考えられ、黒崎（2014）の指摘のように、非英語圏話者の英語に対応できる英語力が求められるのは明らかである。英語専攻の学生は、英語が好きで英語圏文化への関心が高く、ネイティブ発音へのこだわりを持ち、「せっかく外語大で英語を学んだから、英語を活かせる仕事に就きたい」と思う学生も多いであろう。しかし、

実際には日本企業において英語を活かせる仕事というのは限られており、英語を使った仕事を希望するのであれば、英語圏文化にこだわらず、多言語・多様性に対する理解や異文化への寛容性を持つことが求められる。これは、「日本語が母国語の英語学習者がネイティブレベルのように話すことを目指す」という達成困難な目標ではなく、さまざまな言語文化的背景を持つ人々との「コミュニケーション手段としての英語の習得」という達成可能な目標を意識することにも繋がる。【英語を使う仕事にこだわる】場合も、【仕事での英語使用にはこだわらない】場合も、どのような英語が何のために必要なのか、第二言語としての英語学習において達成可能な目標を意識することが必要であろう。

また、ただ漠然と「英語を専攻したから英語を活かせる仕事に就きたい」ではなく、例えば、希望する英語を使った仕事に必要な英語力と自分の英語力を比較して客観視すること、自分の総合的な英語力をわかりやすく提示できるような英語資格を習得すること、「英語を使う必要があればいつでも使える」ような長期的学習を継続する意思と計画が必要であるのは言うまでもない。

外語大生は一般に、いわゆる海外志向性が強いと考えられるが、現在は就職活動において、海外滞在経験や留学経験は大きなメリットとは考えにくい（船津、2012）。英語プラスアルファをどう広げていくのか、例えば、英語以外の言語の習得、あるいは、会計、マーケティング、ITスキルなど言語以外の分野での専門性を身につけていくことも、英語専攻の学生が「英語を活かした仕事」に就くための現実的な課題であると言える。

## 参考文献

- 船津秀樹（2012）．「海外留学の動機作り：ブリッジプログラムの重要性」留学交流 14, 1-11.
- 木下康仁（2007）．『ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』弘文堂.

英語を活かせる仕事への就業意欲：英語専攻の外語大生は「英語」を将来の職業でどのように活かしたいと考えているのか

国際ビジネスコミュニケーション協会（2013）．「上場企業における英語活用実態調査 2013 年報告書」（国際ビジネスコミュニケーション協会）

<[https://www.iibcglobal.org/library/default/toeic/official\\_data/lr/katsuyo\\_2013/pdf/katsuyo\\_2013.pdf](https://www.iibcglobal.org/library/default/toeic/official_data/lr/katsuyo_2013/pdf/katsuyo_2013.pdf)>（閲覧日：2019年7月20日）

黒崎紫乃（2014）．「企業における英語使用についての一分析—流通・開発業界のケース—」実践女子大学人間社会学部紀要 10, 103-122.

Lambert, C. P. (2001). The viability of learners' beliefs and opinions as input for second language course design, *RELC Journal*, 32(19), 1-15.

Matsuura, H., Fujieda, M., & Mahoney, S. (2004) The officialization of English and ELT in Japan: 2000. *World Englishes*, 23 (3), 471-487.

文部科学省（2003）．『「英語が使える日本人」の育成のための行動計画』

<[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siry0/04031601/005.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siry0/04031601/005.pdf)>（閲覧日：2019年7月14日）

内藤永・吉田翠・坂部俊行・飯田深雪・三浦寛子・柴田晶子・竹村雅史・山田恵（2006）．「北海道の産業界における英語のニーズ」に関する調査研究」、『平成17年度助成研究論文集』北海道開発協会開発調査総合研究所.

中原功一朗（2016）．「日本の職場における英語使用の現状と将来展望」自然・人間・社会：関東学院大学経済学部総合学術論叢 60, 95-117.

日本経済団体連合会（2015）．「グローバル人材の育成・活用に向けて求められる取り組みに関するアンケート」

<<https://www.keidanren.or.jp/policy/2015/028honbun.pdf#page=3>>（閲覧日：2019年7月20日）

日本経済団体連合会（2017）．「2017年度新卒採用に関するアンケート」

<<https://www.keidanren.or.jp/policy/2018/110.pdf>>（閲覧日 2019年7月22日）

日本経済団体連合会 (2018) . 「高等教育に関するアンケート結果」

<[http://www.keidanren.or.jp/policy/2018/029\\_honbun.pdf](http://www.keidanren.or.jp/policy/2018/029_honbun.pdf)>

(閲覧日 2019年7月20日)

司馬理恵 (2001) . 「日本企業における就職と英語力の関係：英語力で就職の道を広げる」情報社会試論 8, 47-60.

寺沢拓敬 (2015) . 『「日本人と英語」の社会学—なぜ英語教育論は誤解だらけなのか』研究社.

東京広告協会 (2014) . 「大学生意識調査プロジェクト FUTURE2014 大学生の「日本」に関する意識調査」

<<http://www.tokyo-ad.or.jp/activity/seminar/pdf/FUTURE2014.pdf>>

(閲覧日 2019年7月21日)

椿ますみ (2001) . 「職場で求められる英語力」一宮女子短期大学研究 40, 39-49.